カツオ輸出　期待の中

寿和丸所有 野崎社長「優秀な乗組員ばかり」

いわき市の漁協に所属する巻き網漁船第58寿和丸が23日、千葉県沖で転覆した事故で、県内の漁業関係者は情報収集に追われ、行方不明者の生存を祈った。国内消費の低迷で市内の漁港の水揚げ量が減少するなか、カツオ漁は関係者の期待が高い漁業。経験豊かな乗組員が乗り込んだ船を襲った突然の事故に、家族や船主ら関係者は言葉を失った。

会見で険しい表情を見せる船主の「酢屋商店」の野崎哲社長（左）＝23日午後5時56分、いわき市

「全員無事に帰ってきてほしい」

転覆した第58寿和丸を所有する酢屋商店（いわき市小名浜）の野崎哲社長(53)はこの日、記者会見を開き、疲れ切った表情で時折涙ぐみながら、行方不明者の安否を気づかった。

第58寿和丸は「網船」と呼ばれ、運搬船2隻と魚群を探る「探索船」と呼ばれる船1隻とで船団を組み、漁をしていたという。

今回は今月4日に宮城県塩釜港を出港、現場海域に向かっていた。

事故の一報が野崎社長に入ったのは、この日午後1時半ごろ。第58寿和丸と同じ船団の探索船から「第58寿和丸の姿が見えない。船底が見えている」との連絡だった。

行方不明になっている今野恵洋船長(51)は、沈没した第58寿和丸に98年の進水時から船長として乗船していた。昨年は1年間で約16億円の水揚げ高を誇るなど、操縦にたけていたという。

今野船長について、野崎社長は「慎重かつ温厚でいい男だった。人望もあったので腕のいい漁師が集まり、当社の根幹を成す船団を率いていた」と話した。

野崎社長は「経験豊富で優秀な乗組員ばかりだった。推測だが、（荒天時に船を固定する）パラアンカー中だったので、乗組員は救命胴衣をつけず船室で休憩していたのではないか」と語り、「この状況で転覆するとは……」と言葉を詰まらせた。

県内から唯一乗船 20歳の新田さん

父「よく助かってくれた」

県内から唯一、甲板員として乗船していた、いわき市四倉町の新田進さん(20)は一命を取り留めた。父正さん(60)のもとには転覆から2時間半近くたった午後4時すぎ、救助された本人から、船の非常用電話を使って連絡があった。

正さんが「元気か」と問いかけると、進さんは「元気だ。けがはない」と大きな声で答えたという。正さんは朝日新聞の取材に対し、「よく助かってくれた。本当に安心しました」と話し、胸をなで下ろした様子だった。

正さんに転覆の連絡があったのは、午後2時ごろ。自身も漁師で、この日はウニ漁を終えて自宅に帰ってきたところだった。進さんが勤務する酢屋商店から「船が転覆した。それ以外分からない」と連絡を受けた正さんは「『泳げ』と強く念じ続けた」という。

水揚げ4割占める　いわき

国内の魚の消費低迷などを受け、いわき市内の漁港での水揚げ量も減少傾向にある。98年に約7万トンあった漁獲量は07年には約3万トンに減少。ただ、その中でも、カツオは水揚げ金額が最も大きい魚種。全体で約65億円ある出荷額の約4割を占めており、関係者も漁に力を入れていた。

いわき市内では、小名浜港と中之作港がカツオ漁船の港。小名浜港には約50隻、中之作港には約10隻の漁船が所属している。転覆した巻き網漁船・第58寿和丸の属する「小名浜機船底曳網漁協」は小名浜港に水揚げしていた。

漁業関係者によると、多くのカツオ漁船は事故のあった海域付近で5月上旬から、カツオのまき網漁をしているという。転覆した第58寿和丸は網で漁をする「本船」で、カツオがいっぱいになると運搬船が小名浜港などに魚を運んでいた。

小名浜港は、コンテナ船も着岸できるため、漁業関係者は水揚げされたカツオの輸出にも力を入れていた。小名浜機船底曳網漁協は昨年8月、中国・上海の水産会社との間で業務提携を締結。昨年には2トンの冷凍カツオを中国に船で運んでいた。

第58寿和丸の船主であり、同漁協の組合長でもある野崎社長は昨年12月、カツオ輸出についての朝日新聞の取材に「小名浜のカツオの水揚げ全体からみると、わずかな量だが、既存のコンテナ設備を使って生食用カツオを輸出できるとアピールできた」と期待を述べていた。

早朝から捜索再開

福島海上保安部によると、救助された3人と死亡した4人を乗せた僚船の第6寿和丸は23日午後5時半に現場を離れ、小名浜港に向かった。24日午前7時ごろに入港予定という。24日は早朝から、第58寿和丸の僚船3隻、海保の巡視艇6隻、自衛隊機など航空機4機が行方不明者の捜索を再開するという。

◎ 朝日新聞社　無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。